

奥山廃寺（奥山久米寺）の調査

－ 第114－8次

1 はじめに

明日香村奥山に所在する奥山廃寺には、現在、奥山久米寺が営まれており、塔跡に鎌倉時代の十三重石塔が建つことで知られる。伽藍中心部は、塔跡（1987年度）、金堂跡（1989年度）など、数次にわたる発掘調査の結果、四天王寺式の伽藍配置をもつと想定されている。

本調査は、奥山久米寺の東門改修にともなう事前調査で、金堂と塔の中間東方に東西3.5m×南北2.0mの調査区を設定した。当該地は推定回廊内で、塔基壇外側を二重にめぐる犬走り石列の東北隅推定位置である。隣接地の調査成果から、奈良時代に施された瓦敷きの検出が期待された。また、1995年度Ⅲ区の調査では、本調査区の東に9世紀頃埋没した池状遺構SX335を確認しており、

その西端部の検出も課題となった。調査は2001年11月19日に開始し、28日に終了した。

調査区の基本層序は、近現代の盛土（20cm）、盛土以前の旧地表面とその堆積層（淡緑灰砂および黒灰砂、6cm）、礫・瓦片・凝灰岩などを含む整地層（暗褐粘質土、10cm）、それ以前の地表面（黄緑砂、1.5cm）、礫・瓦を少々含む整地層（黄褐粘質土、10cm）となり、その下層に多量の瓦片と礫を含む粘性のきわめて強い層（暗褐粘土、15～20cm；瓦礫層と呼称）が堆積しており、それを除去すると瓦敷きに達する。瓦敷きの下層には、後述する整地層がある。なお、暗褐粘質土を切りこむ形で、直径50～60cmの平板な花崗岩1個のほか、幅20cm程度の南北溝を形成するように、整形された花崗岩がならべられている。これらの石は旧地表面をなす淡緑灰砂から突出するため、これともしくはこの時期に同時期に併存する東門にともなう施設とみられる。なお瓦敷き上面の標高は、約96.0mである。

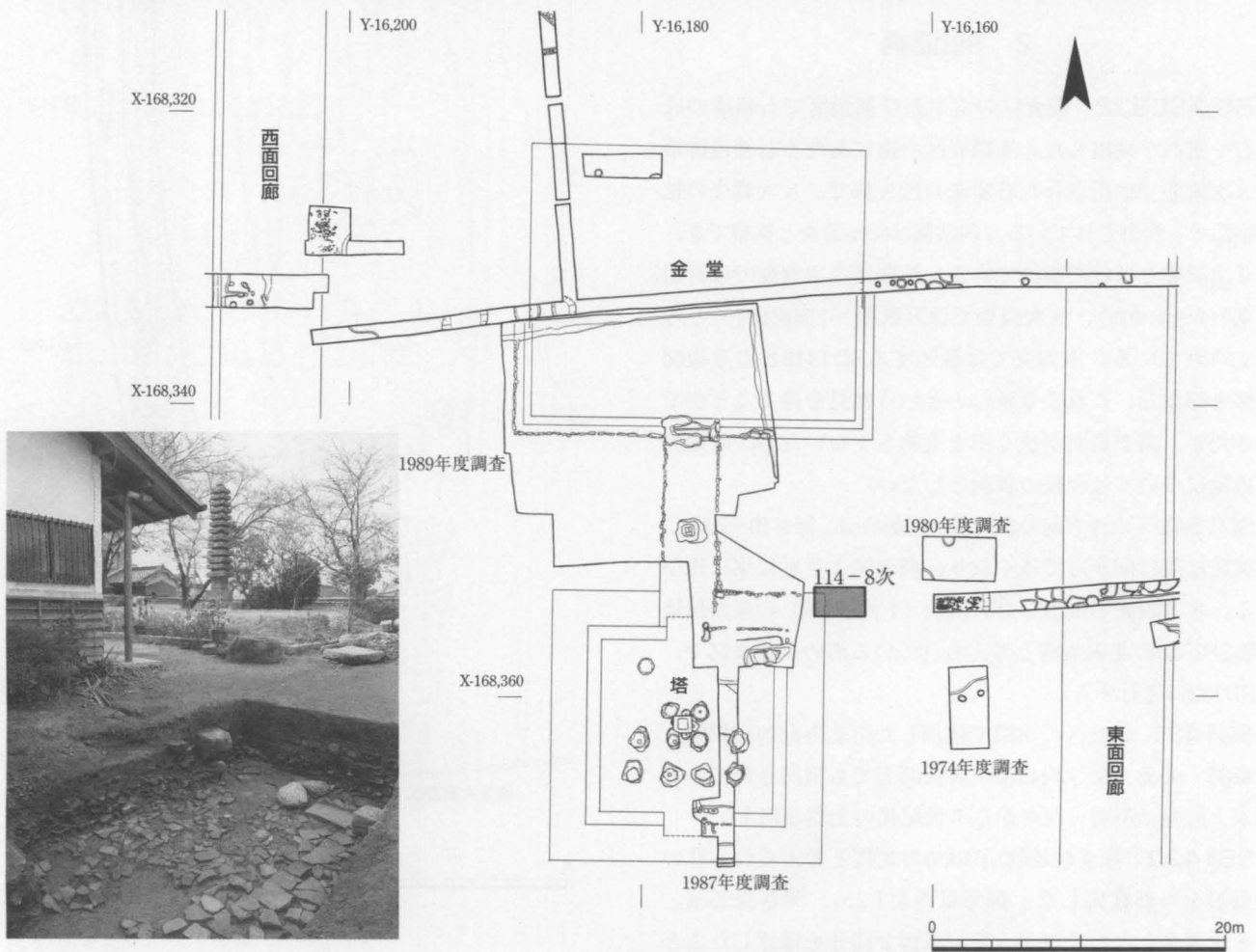


図80 第114-8次調査区全景（西から）

図81 第114-8次調査区位置図 1:500

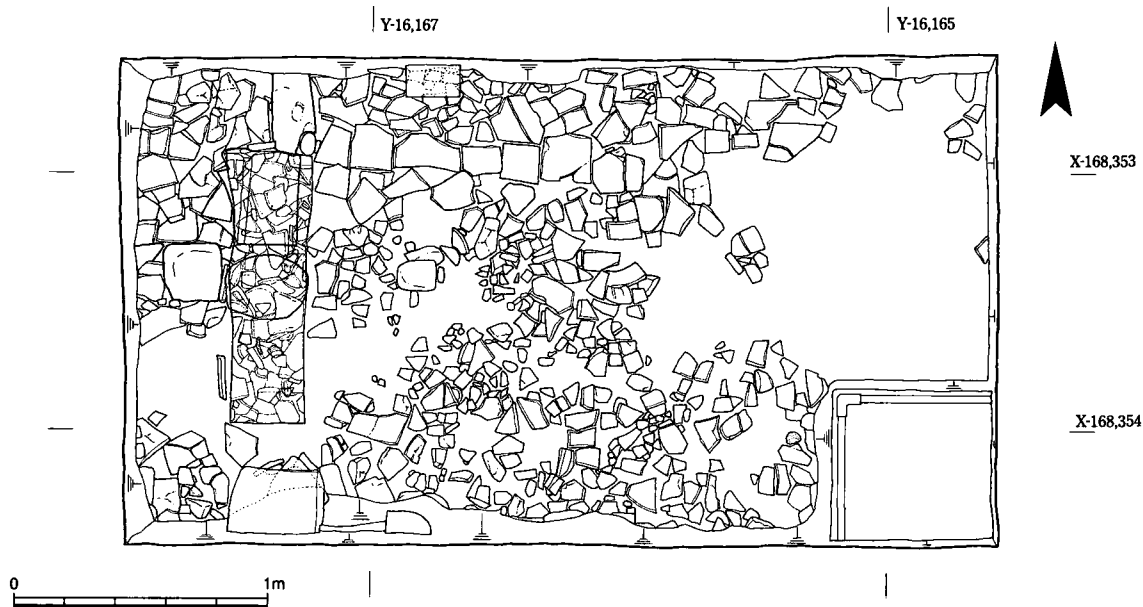


図82 第114-8次調査遺構平面図 1:30

2 検出遺構

瓦敷き 既調査区で検出した瓦敷きを、本調査区でも確認した。北辺部には比較的大きな平瓦片を、凸面を上にして敷きならべている。あきらかに故意に敷いたものがあり、東西にならぶ瓦の南辺をそろえているようにも見えるが、延長部の状況は不明である。調査区中央部以南の瓦は小片で、必ずしも凸面を上としない。ただし、すべて平瓦であり、上面に破面をみせないことから、一つひとつ敷いたものではないにせよ、地表面を形成する瓦敷きであったことは確実にみられる。この瓦敷きの瓦は、既調査の見解と同様、7世紀後半を中心としながらも奈良時代のものを含む。なお、瓦敷きの抜けた箇所は、比較的新しい時期の土坑で破壊された部分である。

石列 調査区西方には、径25cm程度の花崗岩質の玉石が東西に2個ならび、東の石の北側には鴟尾片と丸瓦が続く。これらの北と西には比較的大ぶりの平瓦を敷きつめており、あたかも何らかの施設の東南隅部分のような様相であるが、性格は不明である。鴟尾片は表面を下に、丸瓦片は凸面を上にしており、やはり敷かれたような様相を呈する。土層の観察から、花崗岩質玉石も含めて、これらは瓦敷きと同時期の仕事とみられる。

先述したように、本調査区は1987年度に検出した塔基壇周囲を二重にめぐる外側の犬走り石列の東北隅がかかる位置にあたる。既調査で確認した犬走り石列は、人頭大の玉石を1石もしくは2石幅で東西にならべる。出土した2個の玉石列や瓦敷きの目地は、位置的にみても犬走り延長部にあたるが、南方に折れる石列はまったく確認できなかった。

瓦敷き下層の整地層 瓦敷きが破壊された部分を中心に

土層の断面観察をした結果、瓦敷きの下層に瓦が多量に入る整地層（黄茶灰粘質土、ここでは瓦層と呼称する）があることを確認した。瓦層は厚さが15cmほどであり、礫を含まず、比較的大ぶりの瓦を乱雑に投げこみ、敷いたものでないことはあきらかである。瓦敷きがよく残る箇所の下層も、ピン差込による調査の結果、同様の瓦層があると考えられる。ただし東方には攪乱があり、瓦層の正確な範囲は不明とせざるをえない。なお、この瓦層から出土した瓦は7世紀前半のものである。

さらに、瓦層の下層には遺物をほとんど含まない整地層（茶斑のある黄灰シルト、厚さ約17cm）がある。わずかに出土した土師器片も7世紀のものであった。これらの土層の解釈については後述する。

なお、検出が予想された池状遺構SX335の続きは、調査区東壁の断面観察（標高95.4mまで確認）では、検出できなかった。土層の観察からみて、本調査区がSX335の埋土上にあるとは考えられず、SX335の東西幅は最大でも8.5mである。

（箱崎和久）

3 出土遺物

わずか7㎡の調査区から多量の瓦類が出土した。内訳は軒丸瓦7点、軒平瓦4点、鴟尾1点、鬘斗瓦1点、丸瓦337点（43kg）、平瓦1390点（119kg）である。

軒瓦 軒丸瓦は奥山廃寺Ⅱ型式Aが1点、Fが1点、Ⅲ型式Aが1点、Ⅷ型式Aが2点、XV型式が1点、雷紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦（いわゆる紀寺式）が1点、軒平瓦は1型式Aが2点、3型式Bが2点である。奥山廃寺では今回はじめて雷紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦が出土した。この瓦に関しては、奥山廃寺所用瓦あるいは瓦敷き敷設時の搬入品の両面で、可能性を想定しておきたい。

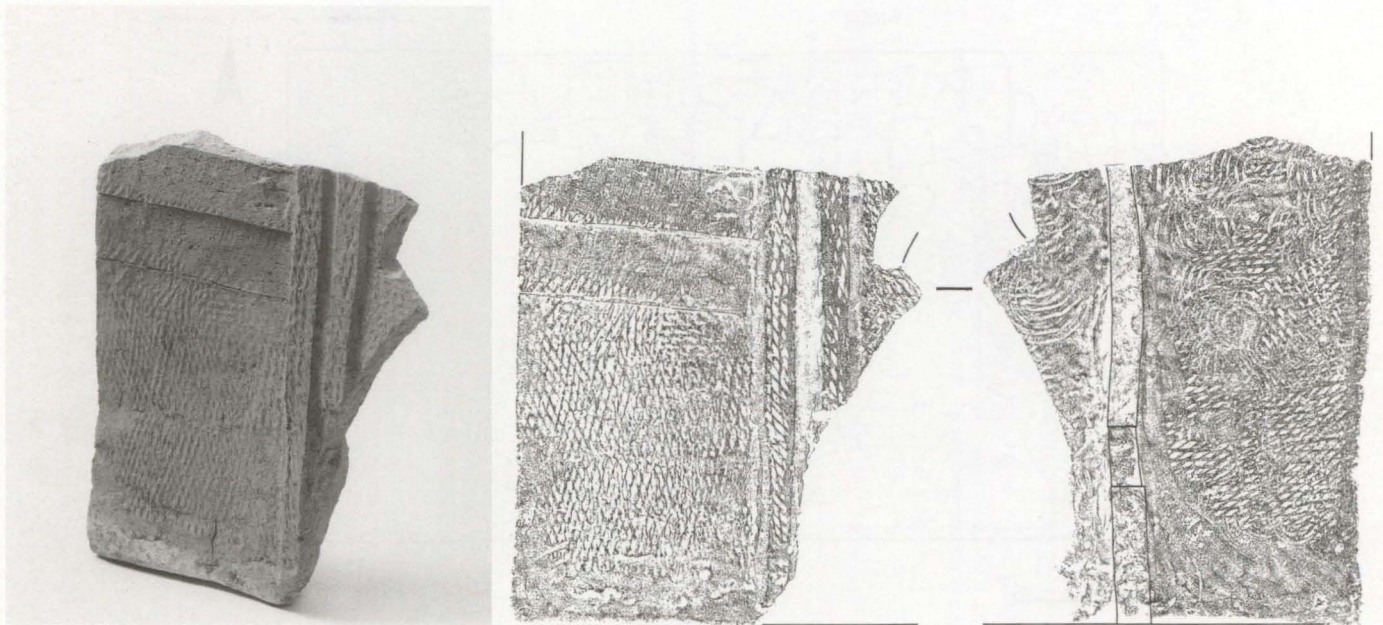


図83 第114-8出土鴟尾 拓本は1:6

丸・平瓦 瓦層から出土した丸瓦は35点(7.4kg)、平瓦は178点(19.8kg)である。丸瓦は玉縁部を別成形するものに限られる。平瓦凸面はスリ消したものが大半で、わずかにハケ目を残すものが含まれる。いずれも7世紀前半の時期に相当するものとみてよい。

鴟尾 出土した部分は左側面基底部の破片である(図83)。幅3~4cmの粘土紐を積み上げて成形し、内・外面を斜格子叩きで叩き締める。内面にはさらに同心円のあて具痕跡が残る。鰭部は正段を削り出し、縦帯は2条の凸帯を貼りつける。側面には基底部から約30cmの位置に、また腹部にも基底部から12cmの位置に弧形の透し孔がある。入母屋屋根用の鴟尾で、出土地点からみても、金堂所用と判断してよいであろう。

この鴟尾の正段や縦帯の意匠・成形手法は岡山県牛窓町所在の寒風古窯址群出土例と酷似している。寒風例と酷似した製品はこのほかにも岡山県や香川県で多く確認されており、近年では大阪府細工谷遺跡でも出土した。今回さらにその範囲が東に広がることとなった。

これまで岡山県から奥山廃寺や豊浦寺に供給した瓦窯として、都窪郡山手村所在の末ノ奥窯跡の存在が知られていたが、児島湾を中心とした、さらに広い範囲で飛鳥地域の寺院へ供給する瓦類の生産がおこなわれている可能性が高くなった。(西川雄大)

4 成果と課題

本調査では瓦敷きを検出し、あらたに見切りとなる可能性がある石・瓦列を検出した。伽藍内建築の具体的な規模などに関する情報は得られなかったが、鴟尾の出土とともに、瓦敷き下層に瓦層を発見したことによって、

造営の様相をうかがう資料を得た。

既調査により、金堂は7世紀前半中頃の創建と考えられ、川原寺中金堂に匹敵する、飛鳥時代寺院としては第一級の基壇規模をもつことが判明している。入母屋造用鴟尾の出土により、金堂の建築自体も比較的格の高いものと推定できるようになった。ただし、この鴟尾は瓦敷きの一部をなすことから、瓦敷きが施工された時期までには廃棄されたことになる。

ところで、7世紀後半以降に金堂基壇は大がかりな改修を施されたことが判明している。また、掘込地業を伴う塔は、その基壇土中に7世紀前半の瓦を多く含むことから7世紀後半には建立されたと考えられる。本調査区で検出した瓦敷き下層の瓦層は、7世紀前半の瓦を多量に含み、土層の標高も塔基壇土中のものとはほぼ一致するが、塔基壇中の瓦層は内側の犬走りまでで終わり、その外側にはのびない。金堂周囲の瓦敷き下層でもこのような瓦層を検出しておらず、この瓦層の性格は不明とせざるをえない。ただし、瓦層に含まれる瓦および塔基壇中の瓦の量は、屋根の一部の瓦葺き替えとみるには、あまりにも量が多く、大規模な上部構造の改修にともなうものと考えられる。瓦研究者から同様の指摘もあり(佐川正敏・西川雄大「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究I』奈良国立文化財研究所2000)、7世紀後半に、基壇も含めてそれまでの金堂を大改修し、いっぽうで塔を創建して寺観を整えたのではないだろうか。また、一面の瓦敷きは、伽藍堂塔建設の最終段階に敷かれたものと推察する。

奥山廃寺の伽藍廃絶期は明確でないが、瓦礫層の堆積状況から、大雨による土砂崩れのような自然災害だった可能性がある。(箱崎和久)